

中央放射線部

1. スタッフ（平成21年4月1日現在）

部長 杉本 英治、仲澤 聖則
 技師長 寺門 秀司
 副技師長 増渕 二郎、神山 辰彦、高草木 浩
 放射線技師（総数）61名

中央放射線部は、画像診断部（核医学部門を含む）、放射線治療部門の2部門からなる。職員は、放射線画像診断医、放射線腫瘍医、診療放射線技師、看護師、事務職員など、職種が違う総勢100名を越す職員で構成されている。

2. 画像診断部門の特徴

一般撮影、MRI、CTをはじめ血管造影（IVR）など、多種多様な検査を行っている。一般撮影はデジタル化への対応のため全面CRへ、透視装置はフラットパネルへの更新と常に最新の医療を行うべく変革が進んでいる。病院情報システムは、3年を過ぎフィルムレスも安定的に稼働している。

MRIは平成16年に患者数の増加に対応すべく3台目を設置、CTは平成20年64列を設置、その他40列1台、16列2台、ヘリカル2台と3Dへの対応にワークステーションを導入し多くの3D画像を構築している。

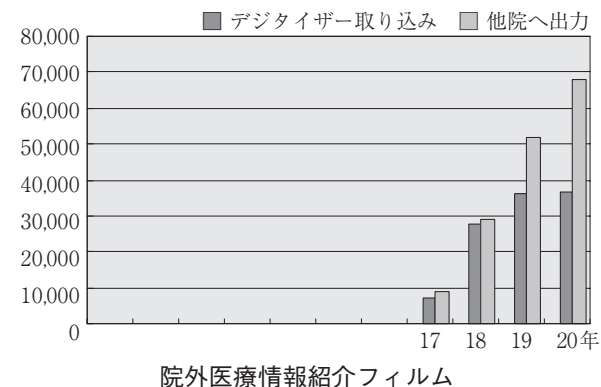
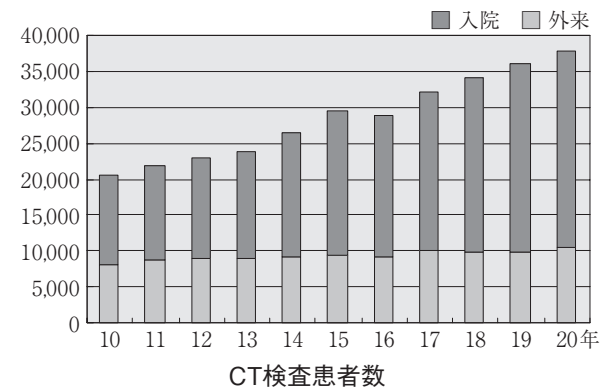
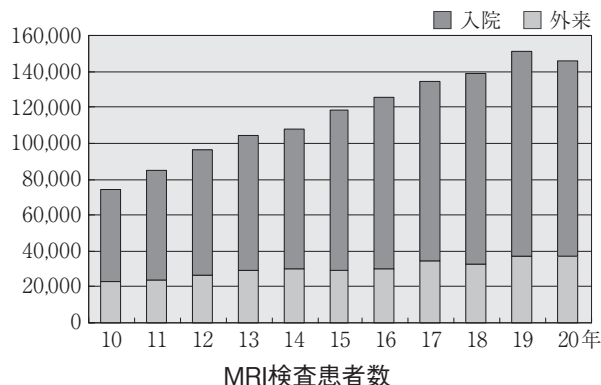
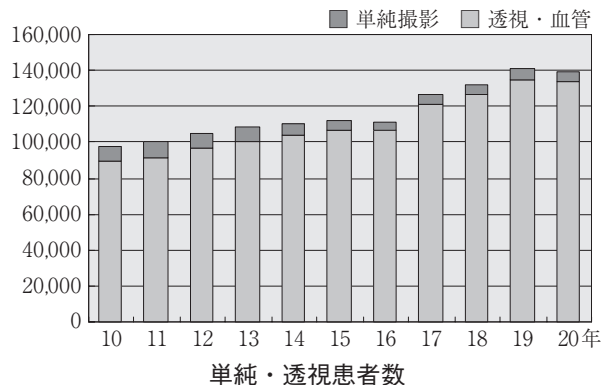
その他、マンモグラフィーは年々増加の一途をたどり、乳がんへの関心の高さを示している。また、血管造影撮影においては、平成17年4月より血管内治療部を設置しIVR（InterVentional Radiology）を中心にフル稼働している。

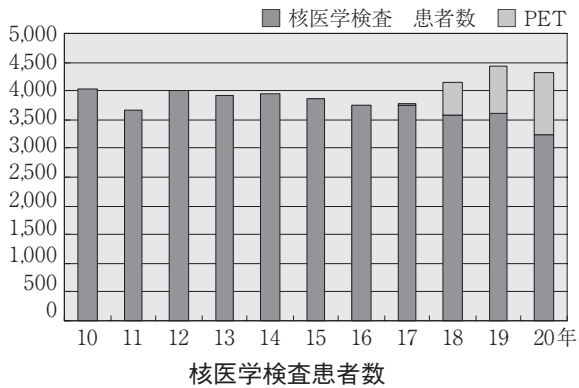
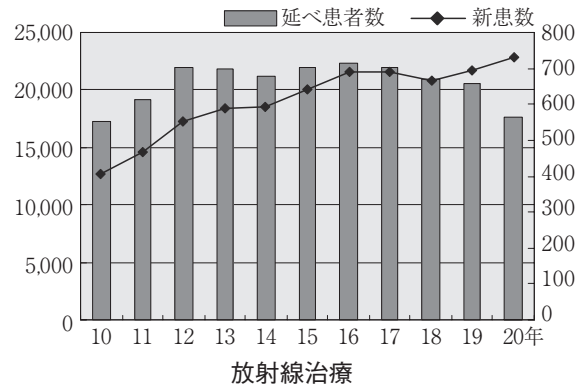
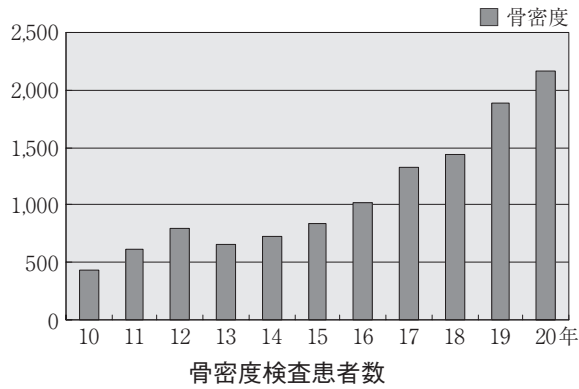
救急部門は、新館一階にありCT、DR、一般撮影と24時間体制での業務を行っている。

子ども医療センターは3年が経過し、放射線機器もMRI、一般撮影装置、X線TV装置が順調に稼働している。

核医学は、ガンマカメラ2検出固定型1台、2検出器可変型1台、3検出器型1台である。検査の種類は多岐にわたるが、骨シンチが45%ともっとも多く、負荷心筋SPECTと続き、検査全体の7割に達する。最近では脳血流統計解析ソフトの活用やMRI・CTとSPECT画像のfusionが盛んに行われている。平成17年12月よりPET-CTが導入され、朝・昼2回のデリバリーによる18F-FDGのPET検査が開始され、順調に推移しているが、昨年からは、検診センターも含め、自由診療でも検査を実施している。

3. 画像診断部門の年ごとの推移





6. 今後の目標

放射線部門では、安全安心の検査、治療を目標にスタッフの教育・研修を行うと共に、高度医療への貢献が必要と考える。診断部門では、MRIの増設（3.0 T）へ向けての検討、治療部門では、ライナックの更新（3台体制へ）作業を目標に実施していきたい。

4. 放射線治療部門の特徴

治療部門では、平成19年5月より3台目のライナックが導入され、ライナック3台、腔内照射装置（新型小線源コバルト治療装置）を有して、4台の治療装置が稼働している。

ライナックでは、全身照射、定位放射線照射（頭部）等も行っており、1日85～100人の症例に対して放射線治療を実施している。また、今回導入されたライナックを用いて20年1月より体幹部定位照射（主に肺）を開始している。さらにIRMT治療もトライアルを開始しており、より高度な放射線治療が可能となっている。

5. 放射線治療部門の年ごとの推移

新患治療計画の患者数は平成10年に比較して、平成20年は約2倍近く増加している。一日治療患者数の処理能力の限界によって、従来施行して来た多分割照射の患者数は制限せざるを得なかった。また骨転移などに対する緩和照射は、できるだけ小分割で施行するような変遷があり、その結果延べ患者数は絞られてきている。